

自立活動部だより

第3号 令和元年 11月5日発行

東京都立町田の丘学園校長

茂木 裕之

朝夕の寒気が肌にしみる季節になりました。学校は、まちだ祭に向けて、各学部ともに忙しくなってきました。今回の「自立活動部だより」では、9月下旬に行われた国際福祉機器展の紹介、及び本校で行われている「移動検定」について御紹介します。



国際福祉機器展 東京ビックサイト 9月25日（水）～27日（金）

本校では、自立活動部教員が2名、国際福祉機器展に出向きました。広い会場に、一日では見切れないほどの福祉機器の展示がありましたが、その中のいくつかを紹介します。下記に紹介したものは、まちだ祭での展示でも紹介させていただきますので、そのときに詳細をお確かめください。

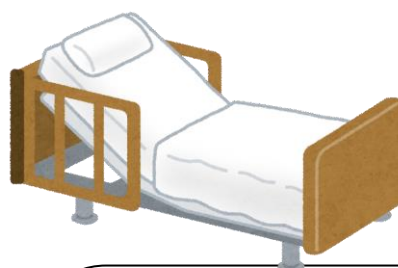
「バギーに装着して、 電動車椅子になる」台車

いろいろなコントローラーで操作でき、最大4キロ/hまで、速度を変更できるものが、展示されていました。バギーを台車に装着し、バギーの中輪や後輪を、台車の駆動輪に置き換えて動きます。

「お知らせ機能のついているエアマットレス」

「大きな体動」「起き上がり」「離床（ベッドからのずり落ち）」が起きたときに、マットレス内蔵のセンサーが感知し、危険の可能性を教えるマットレスがありました。

ワイヤレス受信機がチャイムでお知らせするそうです。



「風が通る涼しいマット」

流れる風で湿気と熱をマットにためないファン付きマット。寒い季節も安心のヒーター付き。10年ほど前からありますが、改良が図られており、折り畳みもしやすくなって、使いやすさがアップしています。

「介助用スーツ」

介助者がスーツのように装着し、腰への負担軽減を図るもの。電気が不要で軽量、装着も簡単なパワフルなものが展示されて、デモンストレーションでは行列ができていました。

また、安価で購入できるゴムベルト仕様のスーツもありました。

「つま先を持ち上げる取り付け式

歩行補助具」

スニーカーやサンダルなどの日常的にはいている普通の靴に取り付けて、靴のつま先を持ち上げ、歩行や運動をサポートする歩行補助具。特に、足がだらんと落ちやすい下垂足の方に適応しています。



移動検定について



本校では、平成29年度より、自立活動部を中心に、生活指導部と連携して、児童・生徒が自力で移動する際に安全が保たれているか判定する「移動検定」を立ち上げ、実施しています。今年度で3年目に入り、合格人数も延べ15名となりました。

(1) 検定の内容

【検定の対象者】

①独歩(杖・歩行器使用など含む。) ②自走用車椅子使用者 ③電動車椅子(電動アシスト車椅子も含む)使用者

【検定の種類】

A 校内見守り B 校内自立 C 校外自立 の段階分けを設定しています。なお、「見守り」「自立」の定義は、表1のように定めています。計8枚のチェックシートを作成(「独歩」に関しては、一枚のチェックシートに「見守り」と「自立」を兼ねたものとした)、それぞれ20項目ほどのチェック項目を設けています。(例:表2)

表1 到達段階の位置付け

全面介助・付添い	付添いは、介助者が、とっさに手が出せる距離にいる。
見守り	介助者が2～5メートルの距離を置くところから始め、最終段階では、本人から見えないようにして観察することも含む。
自立	全く見守りもなく、本人の自己責任で単独移動する。

表2

例:自走車椅子 校内見守り検定 チェック項目例

基本条件	指導者の指示に従うことができる。
安全	発進時に、前後左右確認し、安全な発進ができる。
	停止した時に、ブレーキをする習慣が出来る。
	人にぶつかりそうな時に止まる(避ける)ことができる。
操作	後退ができる。右折、左折ができる。方向転換ができる。
	スロープやエレベーターの昇降を安全にできる。



例:電動車椅子 校外自立検定 チェック項目例

安全	人(や物)と自分との間に安全な距離を保つことができる。
	横断歩道では左右の交通確認をして、安全に道路を横断することができる。
	歩道がない道など、車が来た場合は一度止まり、車が通り過ぎるのを待つことができる。
マナー	人とすれ違ったり追い越したりするときに言葉(代替手段あり)を掛けることができる。
	困ったときなどに道歩く人に言葉(代替手段あり)を掛けることができる。
坂・溝など	溝を越えたり、よけたりなど、安全に走行することができる。

(2) 移動検定を行うことで見えてきた課題と成果

肢体不自由教育部門では、その障害によって、移動するときには付き添い者がおり、自力で移動する経験が圧倒的に少なく、そのために「自ら判断すること」への経験の未熟が大きな課題になることが、移動検定を行う中で、浮き彫りになっています。特に、安全確認への意識不足やその場の状況に適した周囲(通行者や車など)とのコミュニケーションや交通状況の判断の厳しさが課題としてあげられます。移動検定のための練習の過程で、確実に安全確認の意識付けがなされ、安全性の向上が図られていくケースも多々あります。移動検定が無事修了(合格)することで、達成感や自信にもつながっていくことから、今後も、この移動検定を児童・生徒の学びに役立てていきたいと考えています。